

労使間で問われるべきことは何か ～過去最高益なのに景気回復しない日本経済の現状～

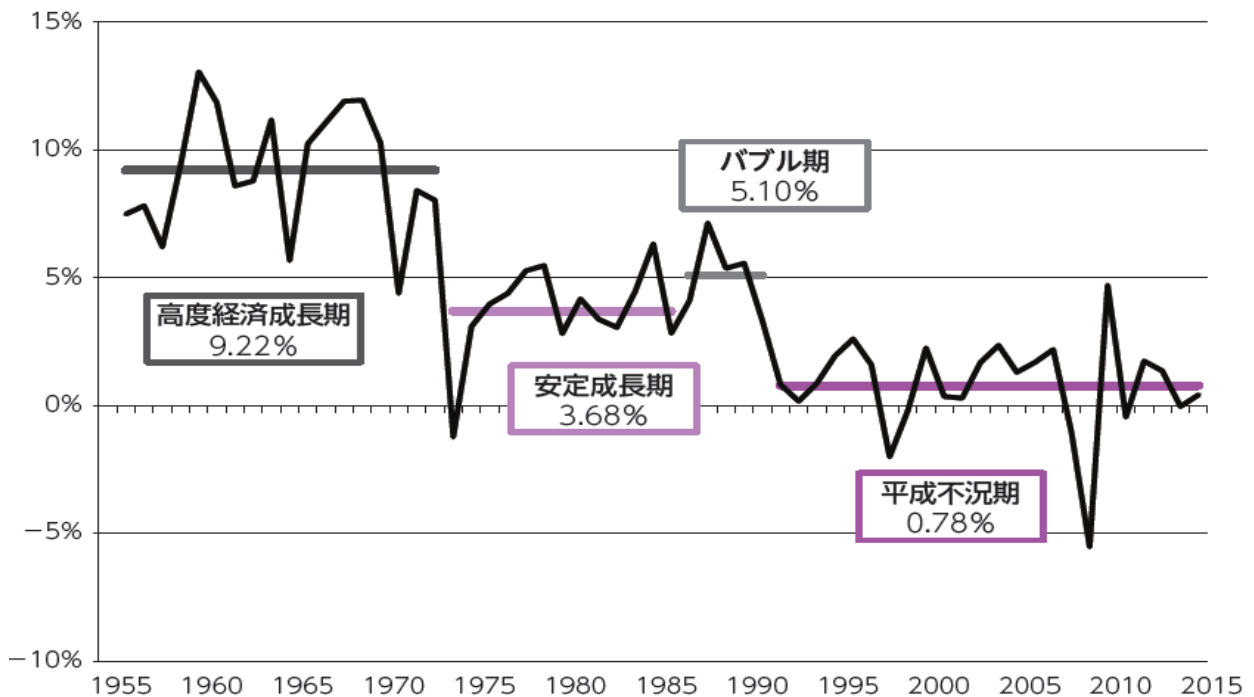
國學院大學経済学部 橋元 秀一

はじめに

法人企業統計調査によれば、企業は2014年度、2015年度に過去最高の経常利益。
それなのに、日本経済は好景気へと回復せず、消費や投資は低迷している。
それを生んでいる日本経済の構造とは？
消費と投資が力強く上向いていかないのは何故なのか。
その上で、賃上げのもつ意味は？ 労使に今問われることは何か、を考える。

1. GDP にみる日本経済の現状

(1) 失われた20年、25年を振り返る



1) 1956～1980年の成長率は1990年基準68SNAの、1981～1994年の成長率は2000年基準連鎖方式93SNAの、1995年から2012年の成長率は2005年基準連鎖方式93SNAの、それぞれ、実質暦年GDPを使用した。

2) 平均成長率は、(各期間の対前年比率の幾何平均) - 1 によって計算した。

資料出所：内閣府国民経済計算(GDP統計) <http://www.esri.cao.go.jp/jp/sna/menu.html>

詳しくは、後掲の表「GDP・経済成長率・輸出入の推移」を参照。

		GDP・経済成長率・輸出入の推移(1955～2000年)					(金額の単位は10億円)				
		名目			実質						
暦年	GDP	成長率(%)	純輸出	輸出	輸入	GDP	成長率(%)	純輸出	輸出	輸入	
1955	8369.5		44.9	921.2	876.3	47075.0		-330.9	1464.2	1795.1	
1956	9422.2	12.6	-43.6	1128.2	1171.8	50602.7	7.5	-559.9	1718.7	2278.6	
1957	10858.3	15.2	-226.5	1277.2	1503.6	54557.8	7.8	-883.1	1915.5	2798.5	
1958	11538.3	6.3	161.2	1269.2	1108.0	57946.9	6.2	-410.3	2014.6	2424.9	
1959	13190.3	14.3	143.2	1480.6	1337.4	63402.7	9.4	-700.5	2277.2	2977.7	
1960	16009.7	21.4	72.3	1713.7	1641.4	71683.1	13.1	-1095.6	2569.4	3665.0	
1961	19336.5	20.8	-308.7	1791.3	2100.0	80179.8	11.9	-1929.4	2704.3	4633.7	
1962	21942.7	13.5	35.2	2066.2	2030.9	87072.6	8.6	-1408.9	3168.7	4577.7	
1963	25113.2	14.4	-205.5	2265.7	2471.2	94724.0	8.8	-2087.7	3389.2	5476.8	
1964	29541.3	17.6	-51.8	2800.1	2851.9	105319.5	11.2	-2101.4	4122.1	6223.5	
1965	32866.0	11.3	459.5	3450.9	2991.3	111294.3	5.7	-1466.6	5104.8	6571.4	
1966	38170.0	16.1	596.8	4031.2	3434.4	122700.2	10.2	-1405.7	5970.0	7375.7	
1967	44730.5	17.2	100.0	4310.8	4210.7	136300.2	11.1	-2678.7	6373.3	9052.0	
1968	52974.9	18.4	590.2	5347.5	4757.3	152532.1	11.9	-2255.5	7894.2	10149.7	
1969	62228.9	17.5	991.5	6558.0	5566.5	170764.5	12.0	-2004.0	9538.1	11542.1	
1970	73344.9	17.9	940.8	7926.1	6985.3	188323.1	10.3	-2938.7	11211.3	14150.0	
1971	80701.3	10.0	2198.1	9452.4	7254.4	196588.9	4.4	-2142.3	13004.6	15146.9	
1972	92394.4	14.5	2134.3	9779.3	7645.0	213129.0	8.4	-3197.0	13540.4	16737.5	
1973	112498.1	21.8	30.2	11291.3	11261.1	230248.8	8.0	-6560.5	14249.7	20810.2	
1974	134243.8	19.3	-999.3	18257.6	19256.9	227427.7	-1.2	-4133.1	17547.2	21680.3	
1975	148327.1	10.5	62.4	18981.8	18919.4	234458.7	3.1	-2069.5	17379.9	19449.3	
1976	166573.3	12.3	1335.1	22582.0	21246.9	243778.5	4.0	-482.5	20265.2	20747.6	
1977	185622.0	11.4	3040.3	24307.6	21267.3	254481.2	4.4	1046.5	22642.6	21596.1	
1978	204404.1	10.1	3554.7	22728.5	19173.9	267897.5	5.3	-503.2	22585.4	23088.7	
1979	221546.6	8.4	-2001.3	25627.3	27628.6	282588.9	5.5	-2512.5	23557.6	26070.0	
1980	240175.9	8.4	-2149.7	32886.5	35036.2	290551.1	2.8	3511.6	27558.3	24046.7	
1981	257962.9	7.4	2049.7	37976.8	35927.1	299762.6	3.2	6868.0	31013.6	24145.6	
1982	270600.7	4.9	2049.5	39390.7	37341.2	308927.2	3.1	7753.1	31304.0	23550.9	
1983	281767.1	4.1	5016.3	39274.5	34258.2	316100.7	2.3	9957.0	32792.4	22835.4	
1984	300543.0	6.7	8200.5	45066.0	36865.5	328483.5	3.9	12420.7	37645.5	25224.8	
1985	320418.7	6.6	10775.6	46307.1	35531.6	342950.3	4.4	14820.3	39693.0	24872.7	
1986	335457.2	4.7	13298.8	38089.9	24791.1	352879.9	2.9	12076.2	37433.9	25357.7	
1987	349759.6	4.3	11014.7	36209.6	25194.9	367555.7	4.2	9460.9	37232.1	27771.2	
1988	373973.2	6.9	8418.1	37483.2	29065.1	390325.3	6.2	5856.7	39440.9	33584.3	
1989	399998.3	7.0	5583.7	42351.8	36768.1	409183.5	4.8	3221.9	43044.0	39822.0	
1990	430039.8	7.5	3048.1	45919.9	42871.8	429985.5	5.1	3045.7	46011.7	42966.0	
1991	458299.1	6.6	7601.4	46722.3	39120.9	446315.1	3.8	6797.6	48425.9	41628.2	
1992	471020.7	2.8	10449.8	47340.5	36890.7	450876.5	1.0	9479.7	50816.2	41336.5	
1993	475381.1	0.9	10854.0	44197.2	33343.2	452281.5	0.3	10271.3	51500.5	41229.2	
1994	479260.1	0.8	10023.1	44409.7	34386.6	455197.3	0.6	8984.0	53864.5	44880.5	
1995	483220.2	0.8	7121.0	45392.9	38271.9	461893.5	1.5	5512.6	56786.7	51274.1	
1996	500309.7	3.5	2677.9	49699.8	47021.9	485219.0	5.1	2977.3	60337.5	57360.1	
1997	509645.3	1.9	6016.2	56332.3	50316.1	492954.2	1.6	9655.8	67320.5	57664.7	
1998	498499.3	-2.2	9716.6	55323.6	45607.0	480586.8	-2.5	12334.9	65610.0	53275.0	
1999	495144.5	-0.7	8079.1	51330.2	43251.1	481561.8	0.2	10763.6	66871.4	56107.8	
2000	490518.2	-0.9	7510.4	55450.8	47940.4	485971.5	0.9	12699.0	75553.4	62854.4	

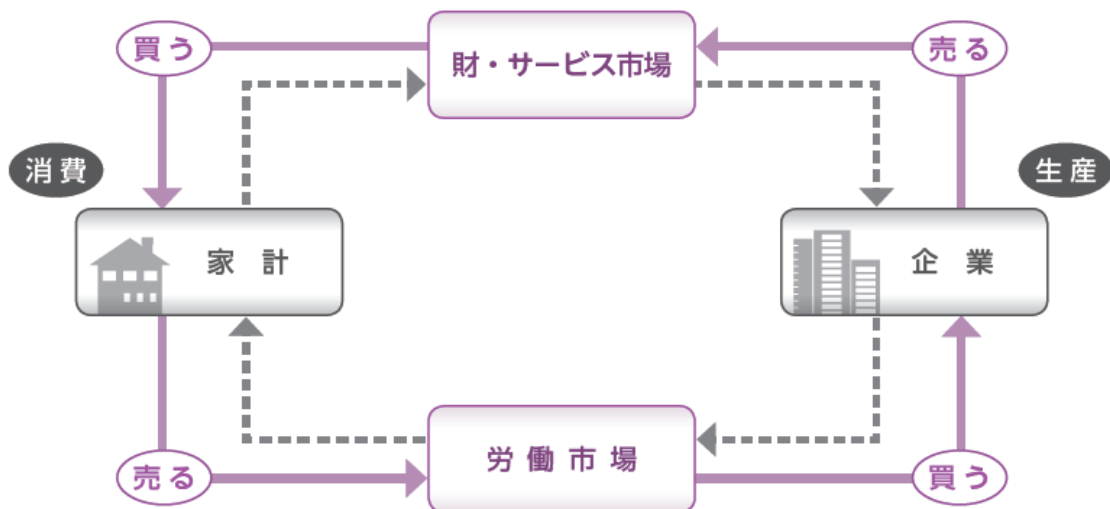
出典：内閣府発表データより作成。注：旧68SNA・1990年基準計数（1999年の計数は速報値、2000年の計数は簡便的に推計した参考系列である。）

		GDP・経済成長率・輸出入の推移(1994～2015年)					(金額の単位は10億円)				
暦年	名 目					実 質					
	GDP	成長率(%)	純輸出	輸出	輸入	GDP	成長率(%)	純輸出	輸出	輸入	
1994	495743.4		9861.7	44627.3	34765.7	446779.9		-258.7	39683.2	39941.9	
1995	501706.9	1.2	6800.4	45417.4	38617.0	455457.9	1.9	-3150.9	41342.4	44493.3	
1996	511934.8	2.0	2363.0	49660.3	47297.3	467345.6	2.6	-7087.2	43772.8	50860.1	
1997	523198.3	2.2	5626.1	56146.8	50520.8	474802.7	1.6	-2865.8	48623.5	51489.4	
1998	512438.6	-2.1	9562.5	55227.9	45665.5	465291.7	-2.0	-749.6	47299.7	48049.3	
1999	504903.2	-1.5	8029.8	51365.7	43335.9	464364.2	-0.2	-1486.2	48151.7	49638.0	
2000	509860.0	1.0	7386.4	55459.4	48073.0	474847.2	2.3	-735.9	54195.8	54931.7	
2001	505543.2	-0.8	3234.2	52823.3	49589.1	476535.1	0.4	-4989.0	50427.8	55416.8	
2002	499147.0	-1.3	6697.3	56168.2	49470.9	477914.9	0.3	-1199.4	54409.1	55608.5	
2003	498854.8	-0.1	8257.1	59227.8	50970.7	485968.3	1.7	1762.4	59567.4	57805.0	
2004	503725.3	1.0	9859.5	66543.8	56684.4	497440.7	2.4	5490.4	67888.4	62398.1	
2005	503903.0	0.0	7093.7	72121.9	65028.3	503,921.0	1.3	7093.7	72121.9	65028.3	
2006	506687.0	0.6	6367.7	81939.4	75571.7	512451.9	1.7	11311.6	79286.6	67974.9	
2007	512975.2	1.2	8673.2	91036.5	82363.3	523685.8	2.2	16629.9	86184.0	69554.1	
2008	501209.3	-2.3	972.4	88770.0	87797.6	518230.9	-1.0	17610.5	87405.2	69794.7	
2009	471138.7	-6.0	1726.7	59814.2	58087.5	489588.4	-5.5	7428.0	66256.9	58828.9	
2010	482676.9	2.4	6055.8	73475.0	67419.2	512654.8	4.7	17370.6	82708.8	65338.2	
2011	471578.7	-2.3	-4006.1	71565.7	75571.8	510325.9	-0.5	13207.5	82406.4	69198.9	
2012	475331.7	0.8	-9170.1	69986.4	79156.5	519216.8	1.7	9353.9	82201.0	72847.2	
2013	479083.7	0.8	-13629.0	77552.4	91181.4	526261.1	1.4	8100.2	83196.9	75096.7	
2014	486938.8	1.6	-15141.7	86400.3	101542.0	526095.7	0	9644.7	90123.4	80478.6	
2015	498896.5	2.5	-4785.4	89282.7	94068.1	528319.5	0.5	11930.4	92564.7	80634.3	

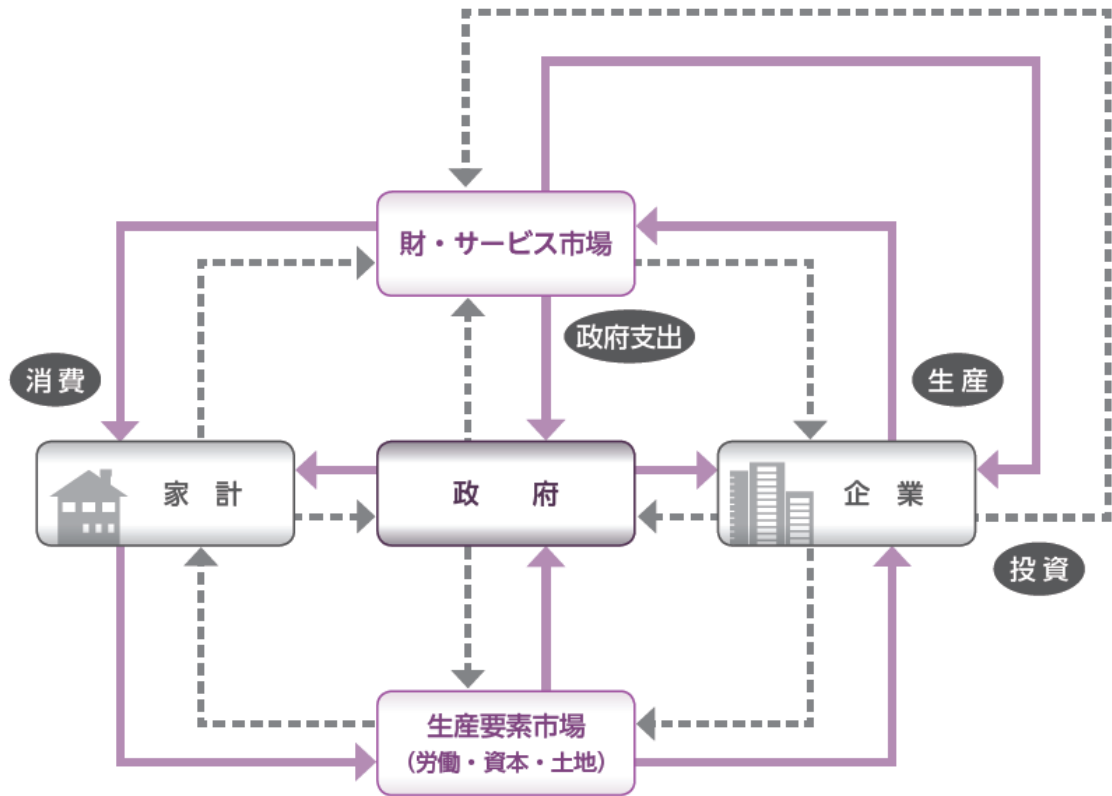
注: 93SNAによるデータである。2005年基準計数。

(2) 経済の大きさを表す GDP とは

単純な経済循環図



より複雑な経済循環図



・ 3面等価の法則 総生産＝総支出＝総所得

・ 名目と実質

名目 GDP＝その年に実際に取引された金額で測定された GDP

実質 GDP＝財・サービスの価格が基準年と同じだったとして測定される GDP

・ GDPの大きさを決めるのは何か

<需要（支出）側の要因>

$$\text{GDP} = \text{消費} + \text{投資} + \text{政府支出} + \text{純輸出}$$

*純輸出とは、(輸出－輸入)のこと

(単位：10億円)

2015 暦年	国内総生産	消費	投資	政府支出	純輸出
名目 GDP	498,896.5	292,326.0	86,071.9	125,284.1	-4,785.4
実質 GDP	528,319.5	306,520.0	86,811.3	124,847.8	11,930.4

<供給（生産）側の要因>

労働・資本・土地といった生産要素の量や、生産の技術が総供給を決める。長期的要因。

(3) GDP の現状

安倍内閣の基調判断(月例経済報告)

平成 28 年 11 月「景気は、このところ弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている。」

12 月「景気は、一部に改善の遅れもみられるが、緩やかな回復基調が続いている。」

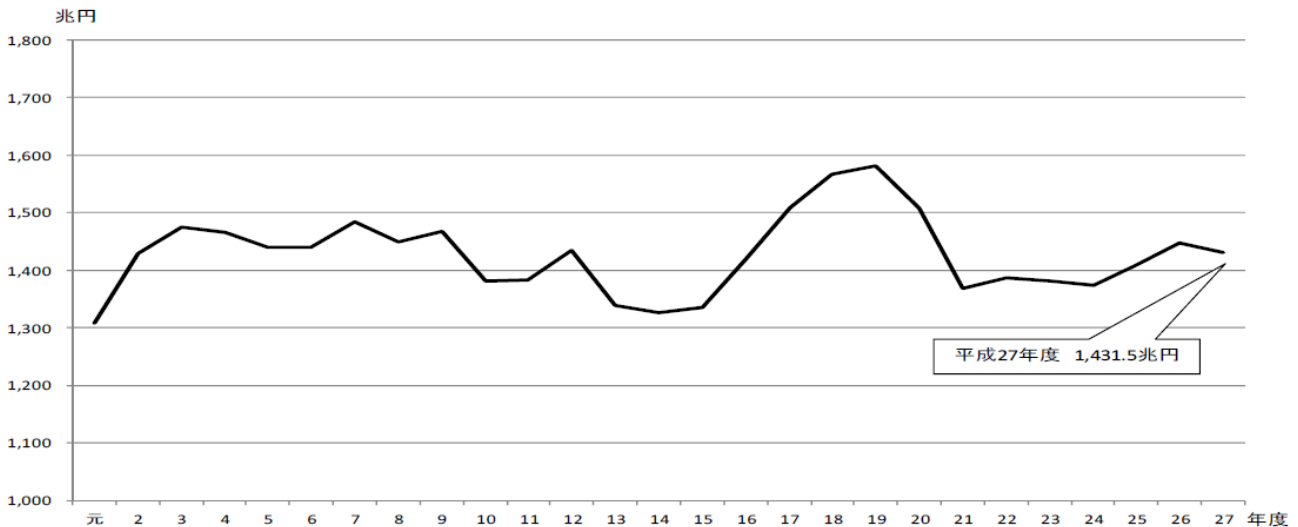
	2015年	2016年		
	10-12月期	1-3月期	4-6月期	7-9月期
実質GDP成長率 [年率]	▲ 0.4 [▲1.6]	0.5 [2.1]	0.2 [0.7]	0.5 [2.2]
内需(寄与度)	(▲ 0.5)	(0.4)	(0.3)	(0.1)
民需(寄与度)	(▲ 0.5)	(0.2)	(0.3)	(0.0)
個人消費	▲ 0.8	0.7	0.1	0.1
設備投資	1.2	▲ 0.7	▲ 0.1	0.0
住宅投資	▲ 0.4	▲ 0.3	5.0	2.3
在庫投資(寄与度)	(▲ 0.1)	(▲ 0.1)	(0.1)	(▲ 0.1)
公需(寄与度)	(▲ 0.0)	(0.2)	(0.0)	(0.0)
公共投資	▲ 0.2	0.0	0.1	▲ 0.0
外需(寄与度)	(0.1)	(0.1)	(▲ 0.2)	(0.5)
輸出	▲ 1.0	0.1	▲ 1.5	2.0
輸入	▲ 1.2	▲ 0.6	▲ 0.6	▲ 0.6
名目GDP成長率	▲ 0.3	0.8	0.1	0.2

2. 企業業績はどうなっているかー法人企業統計からみる

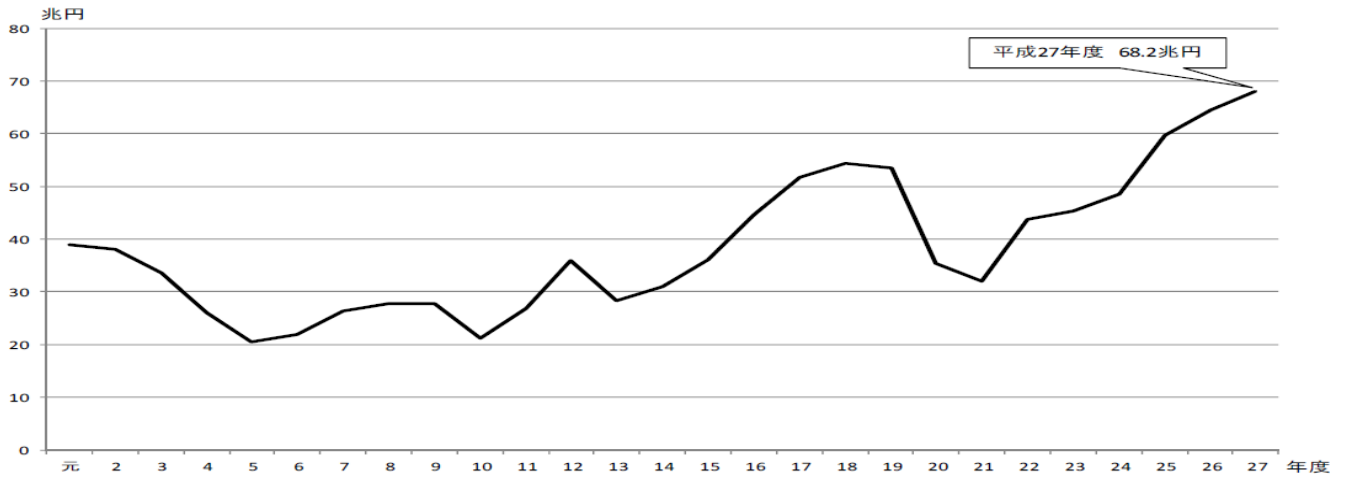
財務省「法人企業統計調査結果(平成27年度)」によれば、売上高は横ばい、しかし経常利益は過去最高。設備投資は徐々に増えるも横ばい傾向

企業の売上高・経常利益・設備投資の推移

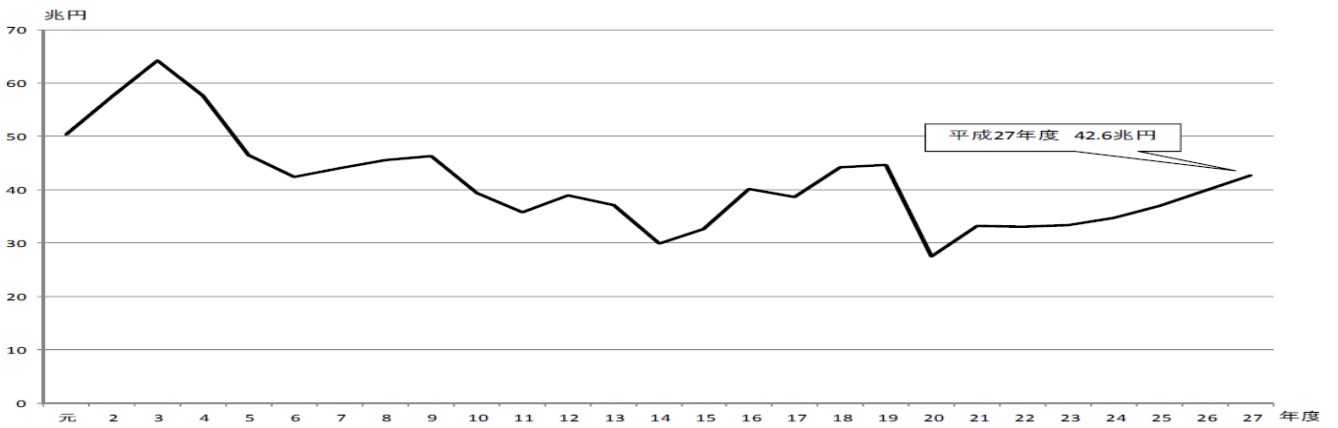
売上高



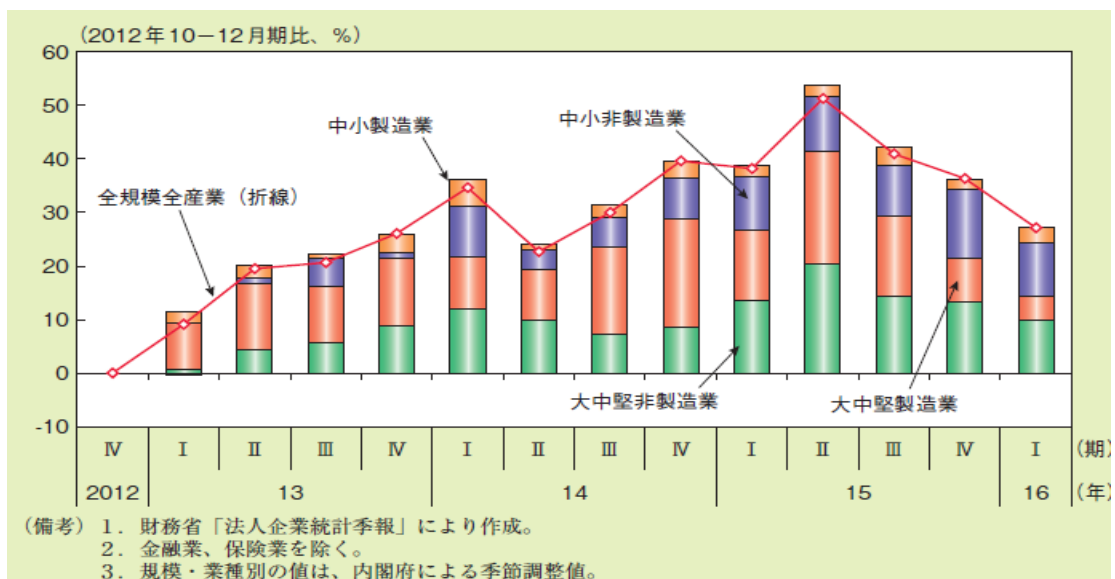
経常利益



設備投資



経常利益の推移



資料出所：内閣府『経済財政白書』平成 28 年度版

3. 雇用・賃金の推移と現状

(1) 大企業でのベア実施、賃上げ

民間主要企業における春季賃上げ状況の推移

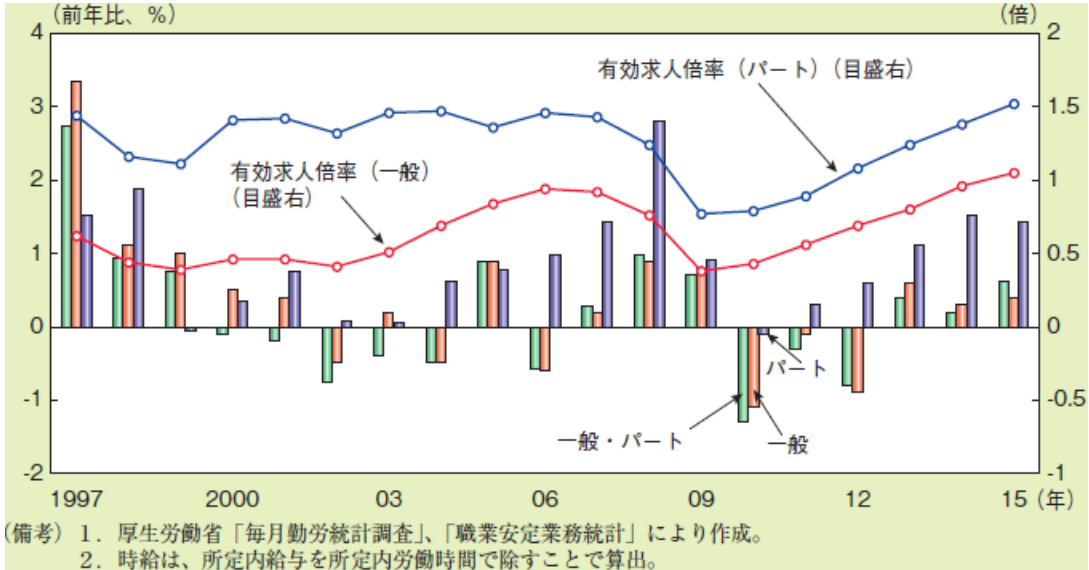
年	現行ベース (円)	妥結額 (円)	賃上げ率 (%)	分散係数	年	現行ベース (円)	妥結額 (円)	賃上げ率 (%)	分散係数
昭和					平成				
40	29,635	3,150	10.6	0.16	元	246,549	12,747	5.17	0.11
41	32,095	3,403	10.6	0.12	2	252,752	15,026	5.94	0.08
42	35,037	4,371	12.5	0.07	3	264,082	14,911	5.65	0.08
43	38,800	5,296	13.6	0.07	4	276,275	13,662	4.95	0.11
44	43,339	6,865	15.8	0.07	5	284,444	11,077	3.89	0.12
45	49,503	9,166	18.5	0.06	6	291,694	9,118	3.13	0.12
46	57,459	9,727	16.9	0.07	7	296,006	8,376	2.83	0.10
47	66,243	10,138	15.3	0.08	8	305,066	8,712	2.86	0.10
48	75,446	15,159	20.1	0.05	9	308,106	8,927	2.90	0.11
49	88,209	28,981	32.9	0.07	10	312,914	8,323	2.66	0.12
50	116,783	15,279	13.1	0.16	11	316,745	7,005	2.21	0.15
51	131,349	11,596	8.8	0.10	12	315,347	6,499	2.06	0.14
52	143,109	12,536	8.8	0.07	13	315,359	6,328	2.01	0.15
53	156,615	9,218	5.9	0.20	14	316,399	5,265	1.66	0.15
54	166,026	9,959	6.0	0.10	15	321,308	5,233	1.63	0.16
55	173,320	11,679	6.74	0.06	16	319,788	5,348	1.67	0.18
56	182,690	14,037	7.68	0.06	17	316,940	5,422	1.71	0.16
57	194,154	13,613	7.01	0.06	18	316,723	5,661	1.79	0.18
58	203,655	8,964	4.40	0.15	19	314,910	5,890	1.87	0.14
59	209,617	9,354	4.46	0.12	20	308,948	6,149	1.99	0.13
60	215,998	10,871	5.03	0.09	21	307,991	5,630	1.83	0.16
61	222,869	10,146	4.55	0.14	22	303,151	5,516	1.82	0.17
62	232,118	8,275	3.56	0.18	23	303,453	5,555	1.83	0.17
63	238,409	10,573	4.43	0.12	24	303,238	5,400	1.78	0.18
					25	304,330	5,478	1.80	0.17
					26	306,469	6,711	2.19	0.18
					27	309,431	7,367	2.38	0.22
					28	310,671	6,639	2.14	0.20

資料出所：厚生労働省「平成28年 民間主要企業春季賃上げ要求・妥結状況」2016年7月
 注：妥結額（定期昇給込みの賃上げ額）などを継続的に把握できた、資本金10億円以上かつ従業員1,000人以上の労働組合のある企業313社

(2) 労働市場の引き締めりと賃金状況

労働市場の引き締めり→総雇用者所得の増加(2015年7月から2016年4月まで前年比プラス。名目は一般労働者、パートとも増加。また、最賃も2013年以来、高い水準へ。

一般労働者・パートタイム労働者の賃金（時給換算）

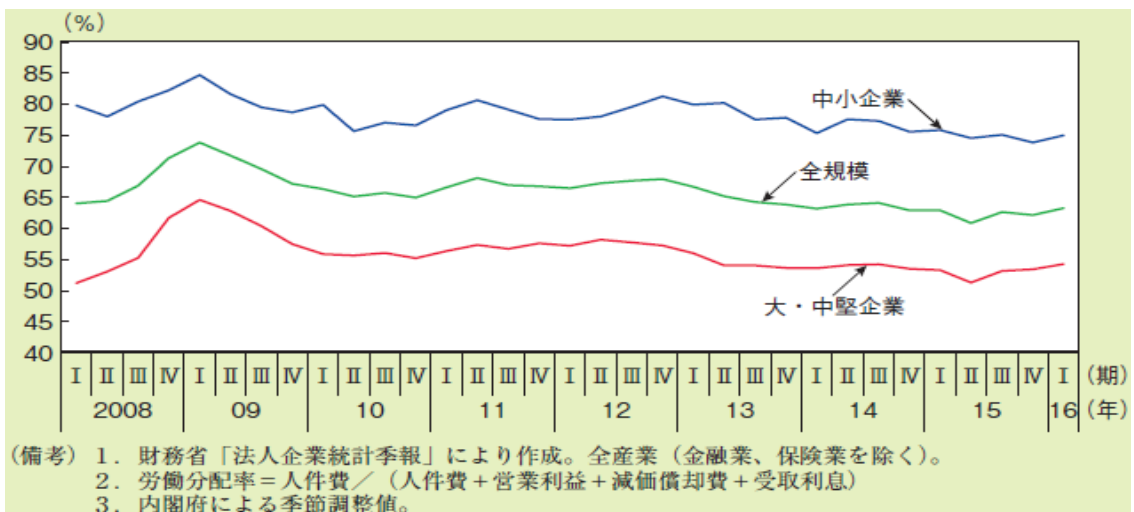


資料出所：内閣府『経済財政白書』平成 28 年度版

しかし、労働分配率は企業収益が高いにも関わらず、「大企業・中小企業ともに緩やかな低下傾向」（内閣府『経済財政白書』平成 28 年度版 17～18 頁）。

『経済財政白書』でさえ、「十分な賃金上昇につながっていない。」（同 18 頁 3 行目）

労働分配率

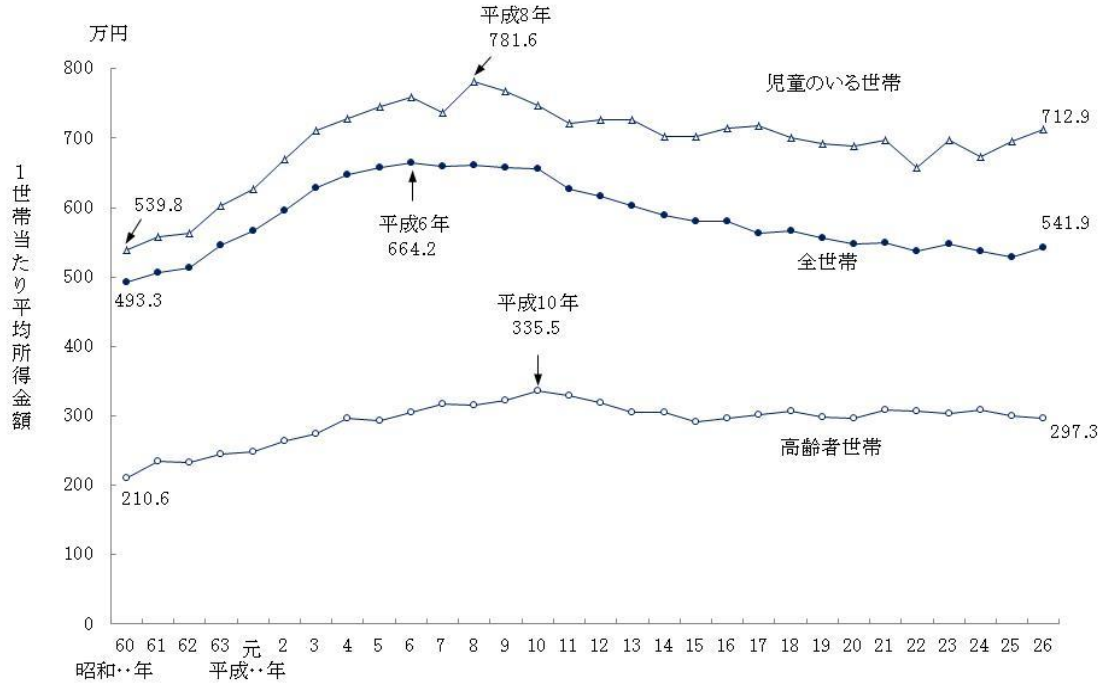


資料出所：内閣府『経済財政白書』平成 28 年度版

(3) 世帯所得

全世帯平均所得は、1994年の664.2万円をピークに、2014年に541.9万円にまで低下。

各種世帯の1世帯当たり平均所得金額の年次推移

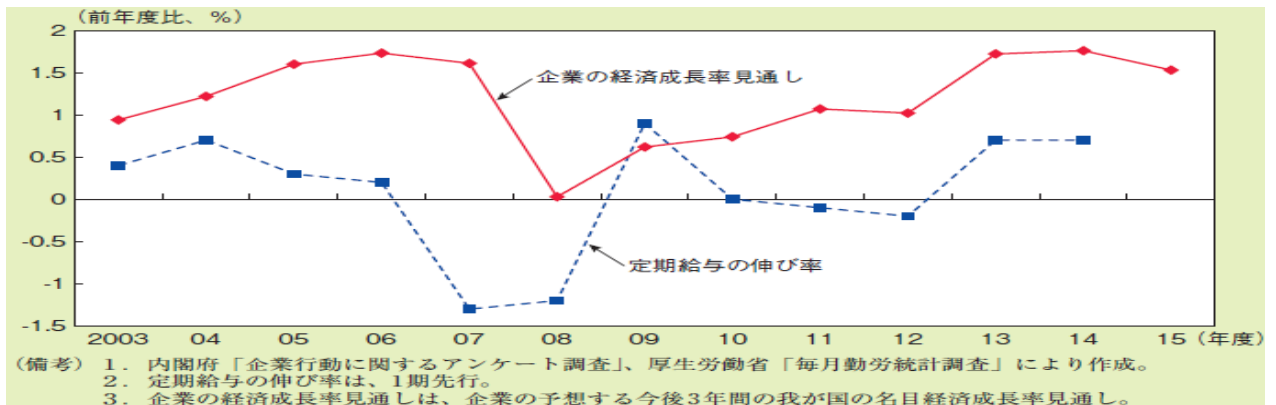


- 注：1) 平成6年の数値は、兵庫県を除いたものである。
- 2) 平成22年の数値は、岩手県、宮城県及び福島県を除いたものである。
- 3) 平成23年の数値は、福島県を除いたものである。

資料出所：厚生労働省「平成27年 国民生活基礎調査」2016年7月

(4) 『経済財政白書』平成28年度版での分析

企業の経済成長率見通しと賃金上昇の関係



『経済財政白書』の分析：「経済成長率の見通しが上昇するほど賃金上昇率が高くなるという緩やかな関係がみられる」（18頁6行目）。

←橋元：当たり前のこと！ これなら子どもでもできる。成長できる経営戦略をたて、リーダーシップを発揮しリスクをとるのが経営者ではないのか。

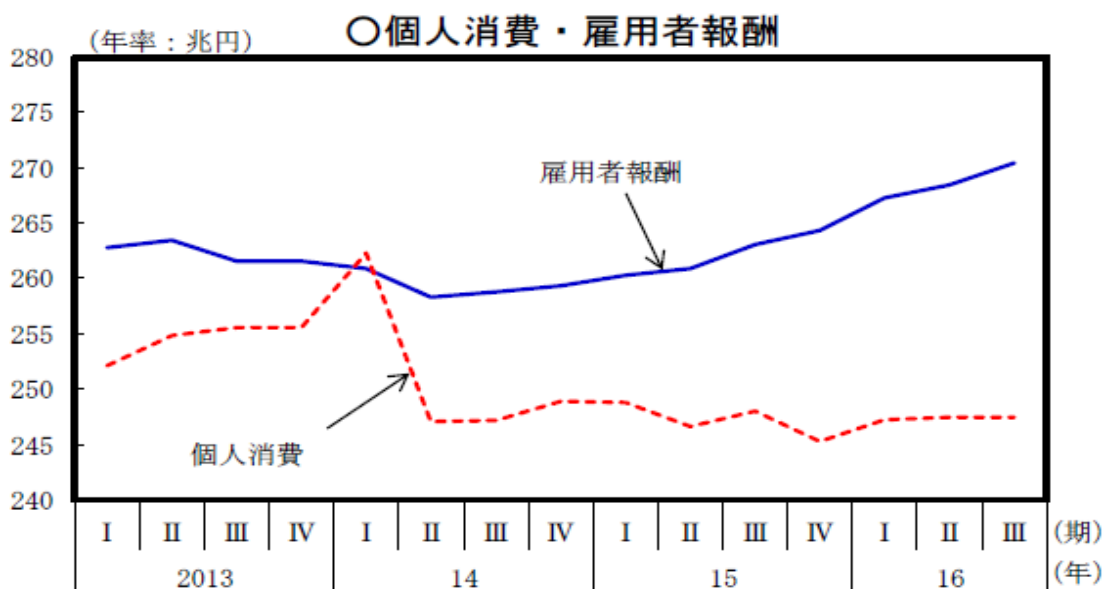
「企業の経済成長率の見通しと賃金上昇の関係をみると、経済成長率の見通しが上昇するほど賃金上昇率が高くなるという緩やかな関係がみられる。こうしたことから、デフレマインドが残り、予想成長率が低い中で、企業は一種の固定費とみられる正社員を中心とした一般労働者の賃上げに抑制的になっている等の可能性が考えられる。経済の好循環を確立するためにも、成長戦略を着実に実行し、企業の経済成長率見通しを高め、それを持続的な賃金上昇につなげていくことが重要である。」（同18～19頁）

4. なぜ消費は拡大しないのか

賃金はわずかではあるが改善しているはずなのに、なぜ消費＝支出が拡大しないのか

- ①賃上げ水準の低さと広がり弱さ
- ②買い替え需要の先食い（リーマンショック時のエコカー補助金、家電エコポイント等）
- ③将来の家計や収入の不安

特に若年子育て期世帯や定年退職など働き方の変化に直面している60歳代前半無職世帯しかも、企業の高収益がそれに見合う賃金増に結果しておらず、労働分配率が低下。
⇒わずかに名目賃金が上がっても、消費増に結びついていない。



(備考) 1. 内閣府「国民経済計算」により作成。
2. 実質。季節調整値。個人消費は家計最終消費支出（除く持ち家の帰属家賃）。

資料出所：内閣府「月例経済報告等に関する関係閣僚会議資料」平成28年11月25日

5. 企業業績が回復しても景気回復にならないのはなぜか

(1) 株主への配当や内部留保の増大

剰余金の配当の推移

- ・ 2011年度を100.0とすれば、12年度117.3、13年度121.0、14年度141.9、15年度186.6
- ・ 前年比で見れば、2012年度17.3%増、13年度3.2%増、14年度17.2%増、15年度31.6%増
- ・ 配当以外の剰余金である内部留保も増大している

(単位：億円、%)

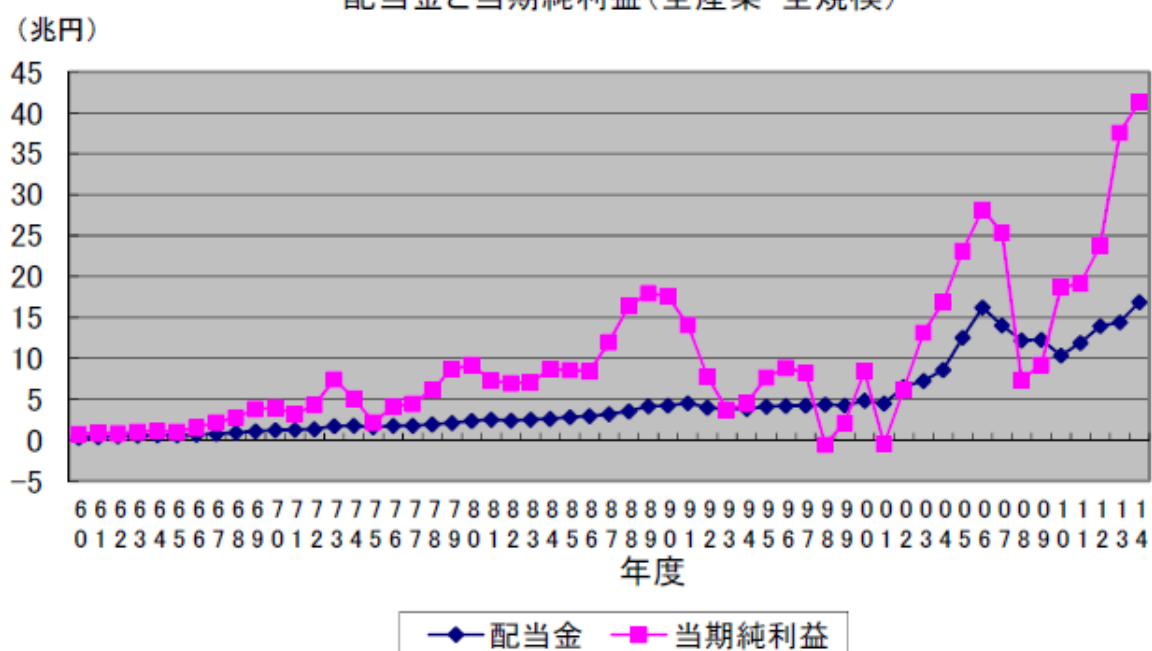
区分	2011 (平成23)		2012 (平成24)		2013 (平成25)		2014 (平成26)		2015 (平成27)	
	金額	構成比	金額	構成比	金額	構成比	金額	構成比	金額	構成比
当期純利益	191,389	100.0	238,343	100.0	375,880	100.0	413,101	100.0	418,315	100.0
配当金	119,005	62.2	139,574	58.6	144,002	38.3	168,833	40.9	222,106	53.1

- (注) 1. 当期純利益＝経常利益＋特別利益－特別損失－法人税、住民税及び事業税－法人税等調整額
 2. 配当金は、中間配当額を含む。
 3. 上記計数には金融業、保険業は含まれていない。

- ・ 2002年以降は配当性向が高まっている

2001年度までは当期純利益が増加しても配当金額は増加しない傾向にあったが、2002年度以降には当期純利益の増加に伴い配当金額が増加する傾向がみられることから、配当性向が高まっている

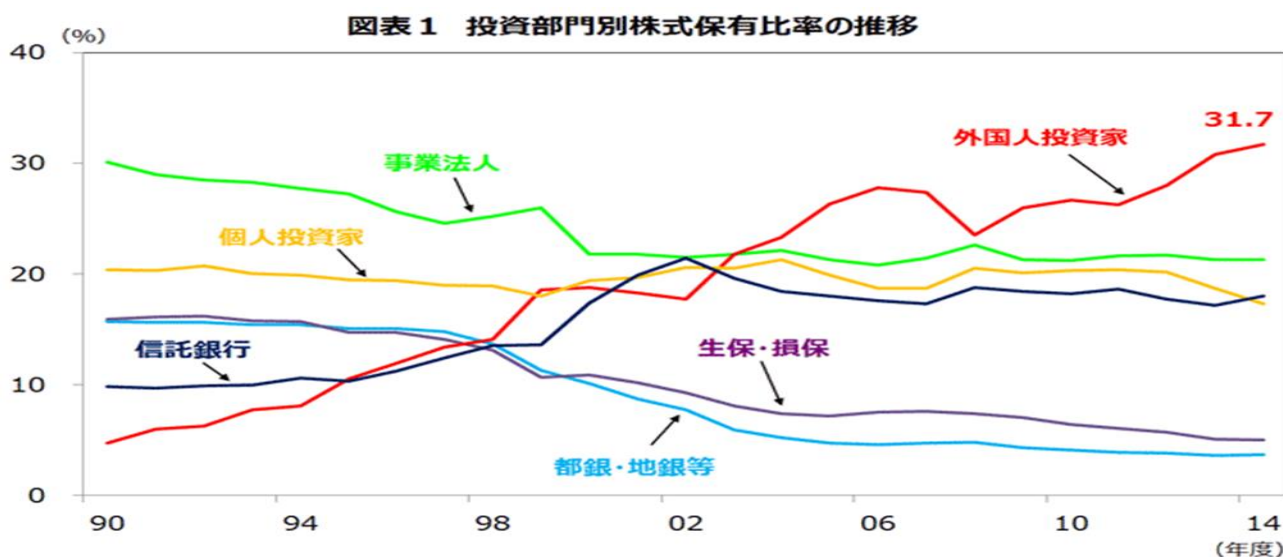
配当金と当期純利益(全産業・全規模)



資料出所：財務省「法人企業統計調査結果」各年度版

(2) アベノミクス下での株価上昇と外資保有の増大

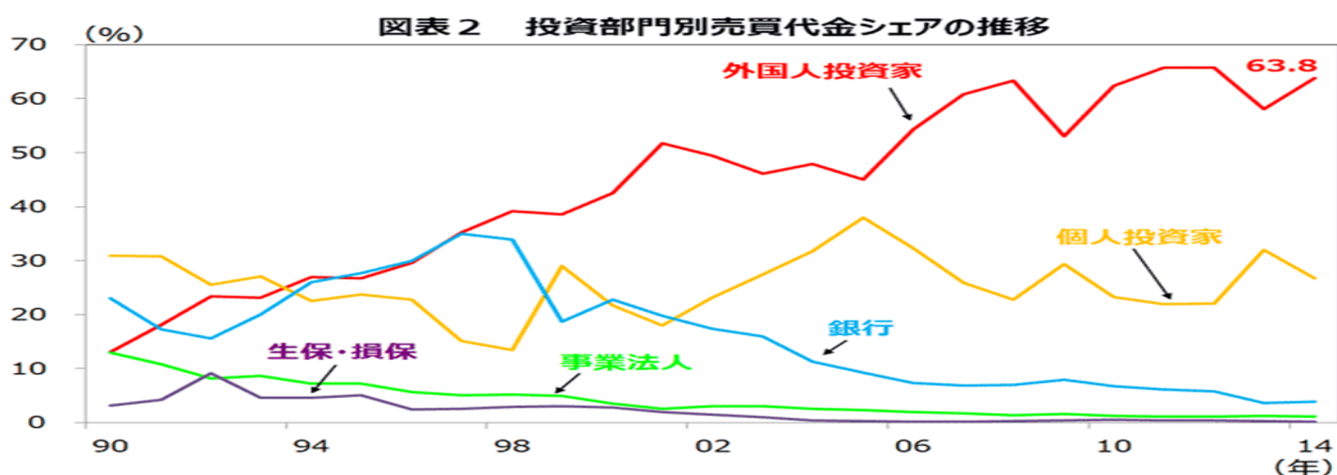
外国人投資家は、日経平均株価が2倍以上上昇した2年半の期間（2012年11月衆議院解散発表以降）で、21兆円の現物、先物を買越した。その結果、外国人投資家の日本株保有比率は2014年度には31.7%と3年連続で過去最高を更新(図表1)。1990年度には5%にも満たなかったが、バブル崩壊後、国内の投資家が株を手放す一方で、積極的に日本株に参入。いまや、30%以上が外資の保有となっている。



資料出所: 日本生命 <https://www.nissay.co.jp/enjoy/keizai/kako/69.html> (2016年11月28日)。

元データは日本取引所グループ「株式分布状況調査」より作成。

注: 全国4証券取引所上場会社の株式保有金額における割合。



資料出所: 日本生命 <https://www.nissay.co.jp/enjoy/keizai/kako/69.html> (2016年11月28日)。

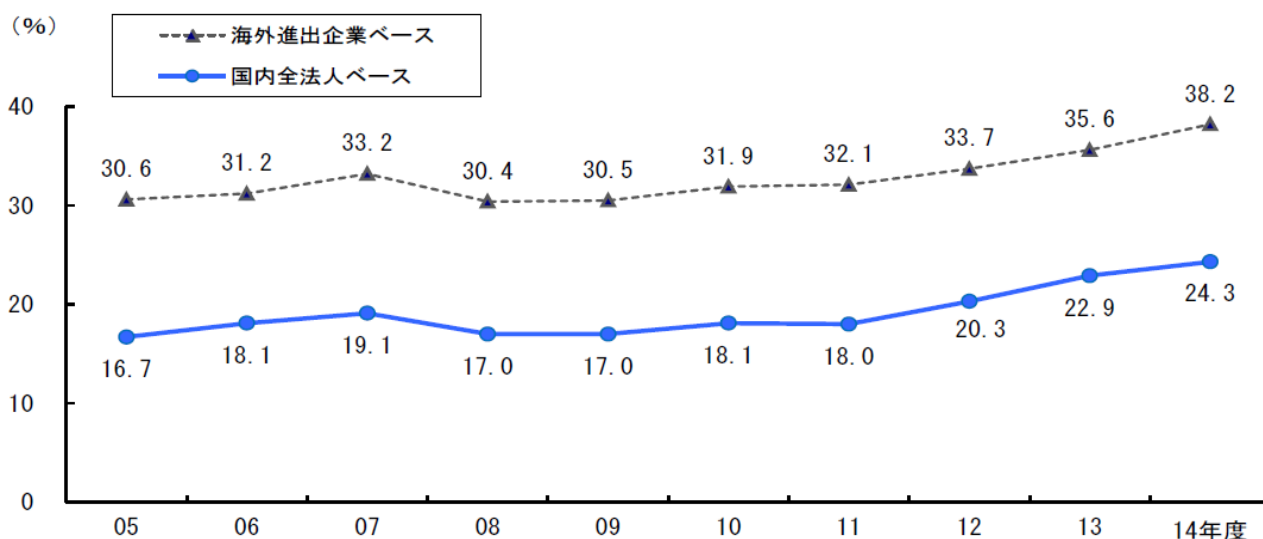
元データは日経 NEEDS より作成。

注: 銀行は、都銀・地銀等と信託銀行の合計。

(3) 海外生産比率の増大とその影響

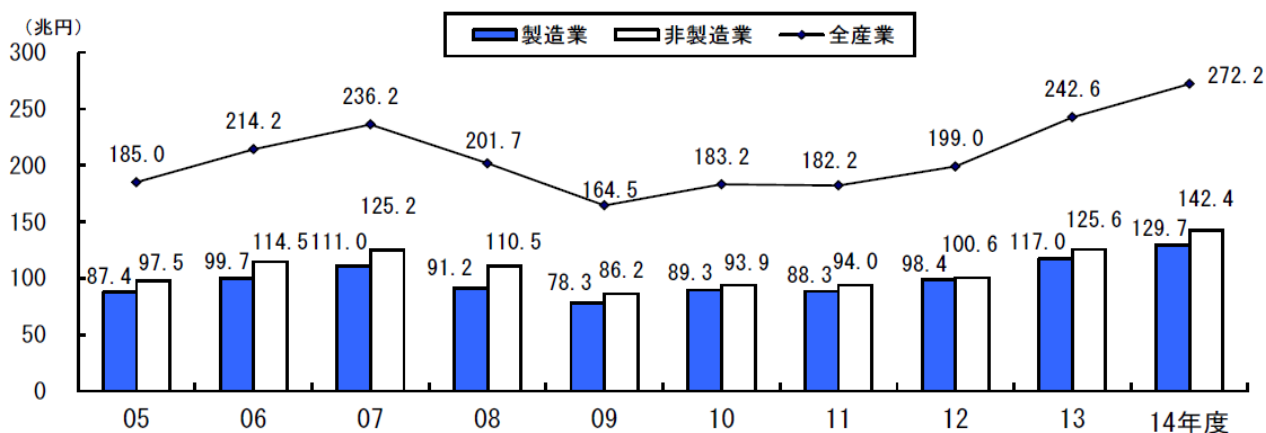
- ・直近データである 2015 年 7 月時点の調査によれば、製造業の海外生産比率（国内全法人ベース、24.3%）は過去最高水準。
- ・現地法人の売上高は 272.2 兆円、前年度比+12.2%の増加となり、経常利益が同+9.4%、当期純利益が同+2.0%、当期内部留保額が同+13.6%とともに増加。製造業の設備投資額はほぼ横ばい。
- ・製造業における現地法人研究開発費 6,530 億円、海外研究開発費比率は 5.3%と 5 年連続で増加し、過去最高水準

海外生産比率の推移（製造業）

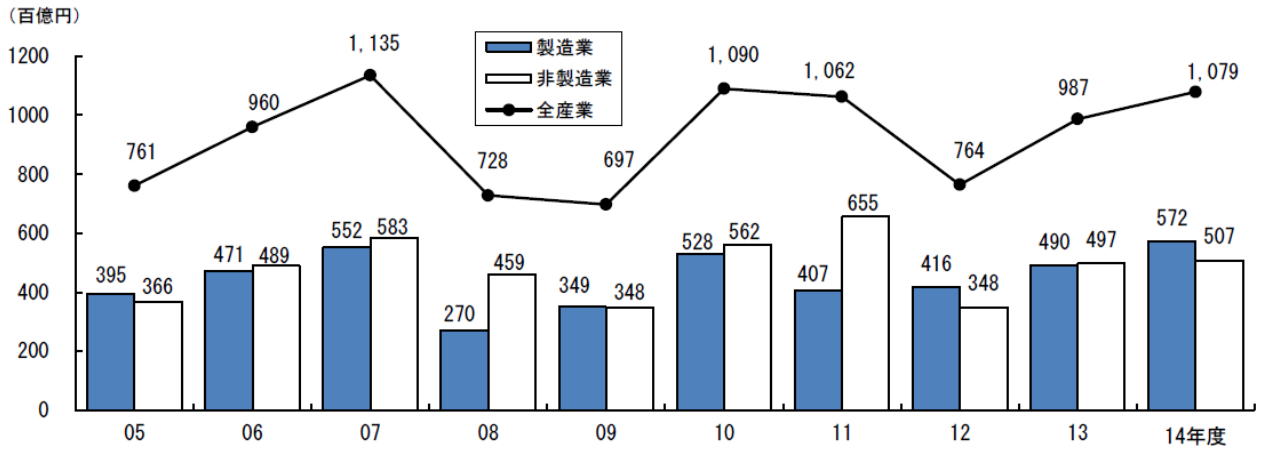


資料出所：経済産業省「海外事業活動基本調査」平成 28 年 4 月

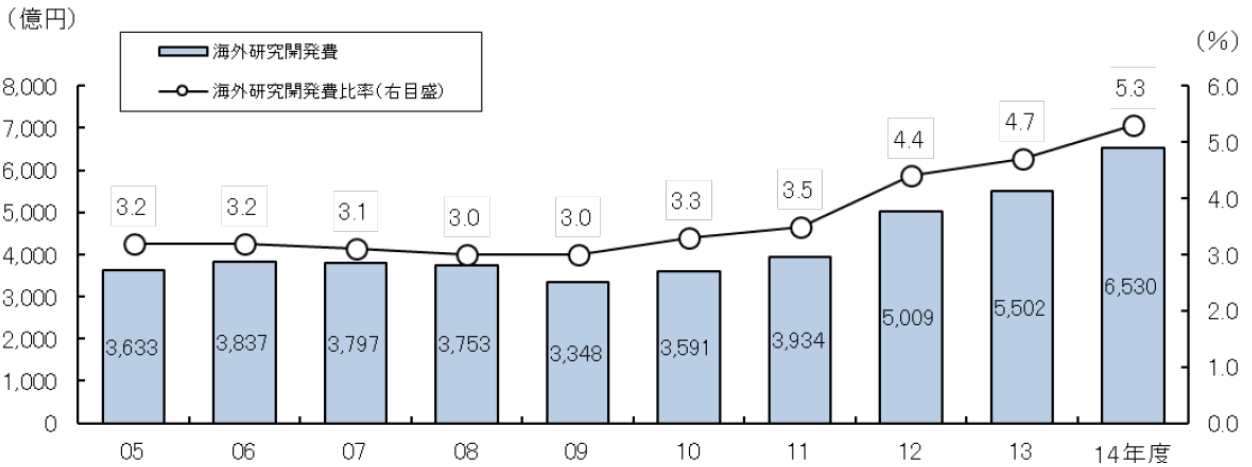
現地法人売上高の推移



現地法人経常利益の推移



現地法人研究開発費及び海外研究開発費比率の推移 (製造業)



(4) 企業業績回復・好調の下で起きていること

国内での売上は横ばいだが、経常利益は過去最高。



一方で、国内での株主配当や内部留保の増大
国内での賃上げ、投資の低調

他方で、外資株式保有率の高まり
海外生産比率過去最高
海外売上も、研究開発投資も過去最高

おわりに

(1) 安倍内閣の政策スタンス（『経済財政白書』平成 28 年版より）

①働く意欲を持つ人の労働参加や成長分野への円滑な労働移動

妨げている「日本の伝統的な雇用慣行を背景とした長時間労働の傾向や正規職員の年功序列を基本とした硬直的な賃金体系」の是正

➡ 「日本の伝統的な雇用慣行」や「年功序列を基本とした硬直的な賃金体系」が原因か。問題の本質は「人件費削減」ではないのか。

②成長戦略等の推進によって成長機会・設備投資を拡大

「加えて、最近増加している M&A や研究開発投資などの設備投資以外の投資」の支援。

「その際、近年、取組が加速しているコーポレート・ガバナンスの強化」

「政府による取組もあつて、独立社外取締役の導入などコーポレート・ガバナンスの積極的な取組がみられているが、そうした企業では、投資機会の拡大や収益性の向上がみられる可能性が本報告の分析でも確認されている。成長力強化に向けては、少子高齢化やグローバル化など企業をめぐる環境の変化を企業成長の好機と捉え、より積極的な経営判断を後押しする仕組みを強化し、浸透させていくことが重要である。」（123 頁）

➡ 株主の利害を重視すれば「企業は成長する」のか？
売買を繰り返す外資などの株主は株を保有し続けるのか？

(2) 賃上げの役割と求められる労働組合の存在感

①消費拡大に結びつくほどの賃上げの必要性

②コーポレート・ガバナンスにおける労働組合の存在感の発揮が不可欠

換言すれば、人材を活かし能力発揮できるようにする戦略や人材への投資を最重要視すること

③労働者目線からの戦略（雇用・賃金・職業人生を展望する戦略、労働者福祉・社会保障政策など）が必要

以上